

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	内海 健太
論文題目	展望記憶における抑制制御過程に関する研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、展望記憶、すなわち未来に行うべき事象の記憶の実現に抑制制御過程が果たす役割を、認知心理学的方法を用いて検討したものである。6つの章から構成されている。</p> <p>第1章は、序論である。本論文で扱われる心理学的構成概念である展望記憶と抑制の定義を行い、本論文の構成を記している。</p> <p>第2章では、本論文における問題と具体的な仮説の提示を行っている。まず、展望記憶に関する研究を概観し、その理論的展開をまとめるとともに、認知心理学における抑制機能の研究を精査して、認知セット抑制と反応抑制という2つの異なるレベルの抑制を区別することの重要性を指摘した。展望記憶の保持過程については認知セット抑制が、検索過程においては認知セット抑制と反応抑制のそれぞれが独自の役割を果たすという本論文における仮説を提示している。</p> <p>第3章では、展望記憶において予定情報の保持を支える情報制御のメカニズムを、認知セット抑制の役割から検討している。実験1では24名の大学生を対象に実験を行い、完了済みの予定に関する認知的表象が効率的に抑制されることを、完了済みの予定に含まれる単語の語彙決定課題における反応の遅延によって確認している。実験2では、実行すべき予定が複数存在する場合の情報制御を24名の大学生を対象とし、同様の課題で検討している。その結果、完了した予定の認知的表象が抑制されると同時に、未完了の予定の認知的表象が、実行の直前において活性化するという可能性が示された。</p> <p>第4章では、展望記憶の検索過程における情報制御のメカニズムを、認知セット抑制の持つ効果から検討している。実験3では48名の大学生を対象に、検索誘導性忘却として知られる現象を引き起こす検索経験パラダイムと展望記憶の実験パラダイムを融合し実験を行った。検索誘導性忘却は、ある情報の検索経験が、関連する別の情報の忘却を引き起こすというもので、認知セットの抑制を反映していると考えられている。実験の結果、展望記憶における意識的想起のための手がかり語が、検索誘導性忘却によってその機能を低下させることを示した。実験4では、大学生48名を対象に実験を行い、実験3と同様の認知セット抑制は、自動的処理による展望記憶検索を阻害しないことを示している。これら二つの実験結果から、意識的処理による展望記憶検索は認知セット制御に依存することが示された。</p> <p>第5章では、展望記憶の手がかり語に対する反応抑制の経験が、展望記憶検索に</p>			

対して及ぼす影響を検討している。実験5では、48名の大学生および大学院生を対象に、反応の抑制を求める実行/抑止パラダイムと展望記憶の実験パラダイムを融合した実験を行った。実行/抑止パラダイムにおいては、ある刺激に対してあるボタンを押すという反応を求める一方で、特定の刺激に対してはその反応を抑制することが求められる。この実験では、繰り返し反応抑制を経験した刺激を展望記憶の手がかり語として用い、その結果、反応抑制の経験が、後続する展望記憶における自動的検索を阻害することを示している。実験6では、48名の大学生および大学院生を対象に実験を行い、実験5と同様の反応抑制の経験は、展望記憶の意識的検索を阻害しないことを示した。これら二つの実験結果を通じて、自動的処理による展望記憶検索は反応制御に依存する可能性が指摘された。

第6章は、総合考察である。本論文におけるここまでの研究結果をまとめ、新たな展望記憶のモデルを提示している。この展望記憶モデルは、保持段階においては後で実行すべき予定に対する認知セット制御が、検索段階においては検索の手がかりに対する認知セット制御と反応制御のそれぞれが独自の役割を果たすことを提案している。最後に、本論文における理論的意義や理論の応用可能性、そして残された課題について議論している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、未来に行うべき事象の記憶である展望記憶について、その機能を支えるメカニズムの解明を目指し、情報の抑制という観点から実験的に検討したものである。大規模な文献展望を行い、先行研究の知見をふまえた精緻でユニークな課題を用いて6つの実験を実施し、それらの結果を展望記憶研究と抑制機能研究の文脈に位置づけ、総合的に検討した論文である。

その論文の特色は以下の3点である。

(a) 従来の展望記憶の研究において等閑視されていた情報の抑制という側面に着目している点

(b) 展望記憶機能の実現に必要とされる抑制機能を、認知セット抑制と反応抑制に区分し、モデル化しようとしている点

(c) 従来用いられてきた展望記憶の課題に、語彙決定パラダイム、検索経験パラダイムそして実行/抑止パラダイムという、異なる分野において開発された実験手法を取り入れ、展望記憶のメカニズムを多面的に検討している点

第1章では、展望記憶の機能的重要性を検討し、適切なタイミングで行うべき行為を想起するという心的機能が、抑制機能によって支えられている可能性を指摘している。これまで注目されてこなかった抑制機能を検討すべき研究課題としたところに着眼の鋭さを見ることができる。

第2章では、展望記憶と抑制機能のそれぞれについて、詳細な文献展望を行い、抑制機能については、認知セット抑制と反応抑制という2つの独立した抑制メカニズムが存在していることを指摘している。そして、この区分に対応するように、展望記憶についても、認知セットの制御と反応の制御が比較的独立したメカニズムに基づいている可能性を指摘している。この点は理論的に重要な貢献である。

第3章では、2つの実験を通じて、予定情報の保持が、関連する認知セットの活性と抑制の切り換えという情報制御のメカニズムに依存していることを示した。展望記憶に関わる情報の保持の状態が、時間経過に伴ってダイナミックに変化することを、工夫をこらしたパラダイムから示したことは、大きな理論的貢献であり、高く評価できる。

第4章では、検索誘導性忘却というエピソード記憶研究において知られていた現象を、展望記憶課題において報告し、過去経験が未来に行うべき行為の想起に影響を与えることを示している。このことは、過去の出来事の記憶である回顧記憶と展望記憶の関係を考えるうえで重要な示唆を持つ。また、この検索誘導性忘却が展望記憶の意識的な想起においてのみ報告されていることは、展望記憶検索のメカニズムについての理論に重要な制約を持つことになり、理論の発展に大きな影響を与え

るものと評価できる。

第5章では、実行/抑止パラダイムという実行機能研究において用いられる実験手法により、展望記憶の自動的検索に反応抑制過程が関与することを示した。これは、展望記憶のメカニズムの多層性を示すとともに、内的表象から反応生成までの過程を展望記憶理論が守備範囲とすべきであることを指摘する重要な発見である。

第6章では、研究のまとめとともに、情報の抑制という観点から展望記憶の新しいモデルを提示している。認知セットの制御と反応制御という2つの過程においてそれぞれに抑制機能が展望記憶のパフォーマンスを支えるという視点は、斬新で、当該分野において新たなアプローチの創発を刺激するものである。

以上のように本論文は、展望記憶を支える抑制機能について、多くの重要な成果を報告しているが、今後に残された問題として以下の点が指摘できる。

- (a) 操作的定義を中心とした議論ではなく、概念的定義による研究結果の理論的考察
- (b) 従来のモデルと今回のモデルの対応関係の明示
- (c) イベントベース展望記憶と時間ベース展望記憶の関係についての統合的検討
- (d) 生理的指標等の導入による理論の深化

しかし、こうした点は、本論文で見出された多くの新しい知見の価値を損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年8月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降